

ニーチェにおけるヘルダーリン受容

平野篤司

はじめに

本論においては、ニーチェがヘルダーリンについて触れている箇所を取り上げてニーチェの先行詩人に対する姿勢ならびにニーチェの精神の特性を抉り出してみたいと思う。じつは、これは先行論文「プロテスタンティズムとしての西洋古典文献学」⁽¹⁾に対する補足である。論者は、この論の主旨を変えるつもりはないが、訂正ならびに補足をしなければならないからである。それは、ニーチェとヘルダーリンの深い同質性を指摘する際に、文献の上のことではあれ、両者の実際上の接点を看過してしまったことにある。それはもちろん当方の見過ごした点であり、それをここで補足させてもらうのだが、あえて強弁のそしりを受けることを冒して言わせてもらえば、これはニーチェの精神の動きそのものに起因するものであり、却ってこのことによりニーチェのありようをより深く知ることとなったということでもある。

ニーチェは「神は死んだ」と宣告することによって却ってそのプロテスタントとしての宗教的心性を深くあらわにしたというのが前論文の基本的な思想であるが、今回はその神殺しのなかには、夙に知られているワーグナーに対する愛憎ばかりではなく、ヘルダーリンもその対象として含まれ

(1) 平野篤司「プロテスタンティズムとしての西洋古典文献学」人文・自然研究 第1号 一橋大学 2006年

ていたのではないかという新たな認識が啓かれてきたということだ。

ニーチェのヘルダーリンについての言及は確かに目立たない。論者はかの論においてその不思議さを梃子に両者の時空をはなれたところで成り立つ共鳴の世界を取り上げたのだが、その目立たなさを別の観点から解釈すべきではないかと思うにいたった。そこには、ニーチェの神殺しという自らの感動と経験を隠蔽する独特な心理的機制が働いていたのではないかという推量である。

1. 「友への手紙」

ニーチェの神に対する関係の持ちようはひと筋縄ではいかない複雑なものであって、これを一概に愛とか憎とか、またその間の変遷とかというふうに纏め上げることはできない。心理学の言葉で言えばコンプレックスというまさに複合的にして複雑な感情であろう。ここで神といったのは自分にとって抜き差しならぬ聖なる対象といってもよい。ニーチェの生涯は、それなりに紆余曲折に富むともいえるが、一様であるといってもよいところがある。それは、このコンプレックスによって貫かれている。特に年を重ねるにしたがってコンプレックスは大きくなり、その内部における振幅も増大するといえよう。その対象はキリスト教の神とイエスキリストにはとどまらない。ワーグナーをめぐる一連の執拗な批判もその端的な例である。そして、自己を問題の中へ投入するときコンプレックスの表現は、自己言及的な著作、たとえば「この人を見よ」⁽²⁾に見られるようにほとんどパロディー風のものになることが多い。ここであらためてパロディーという言葉の原義に立ち返ってみれば、それは古典ギリシャ語では添え歌ということであって、本歌に対する敬愛の意があってはじめて生まれ出るものであり、替え歌のような単なる文学的遊戯とは異なるものであった⁽³⁾。ま

(2) Friedrich Nietzsche: Ecce Homo, 1956 München

してや揶揄、嘲弄というものからはほど遠い。ニーチェの時代はもちろん近代の洗礼を受けているのであり、この言葉は必ずしも原義のような意味で用いられることはなかっただろうが、ニーチェの場合は、その精神の運動をつぶさに見れば、むしろそこにおいてパロディーという言葉がその根源に引き戻されたのではないと思われる。ニーチェの場合にも揶揄や嘲弄はある。だが、それは果たしてもっぱらそれだけのために敢行されたのだろうか。おそらくそうではあるまい。そのような批評的行為は、きわめて深い関心の対象にこそ向けられたのである。対象との抜き差しならぬ対峙の表現なのである。だからそれは単なる遊びではいられない。ニーチェが取り上げる主題は、ことごとく自分自身に発し、自分自身に帰ってくる。それは、自己批評という営為といえよう。それゆえ、ニーチェにおけるパロディーは、その真剣な精神からして、距離を前提とするイロニーの表われとはいえない。引き攣った表情から窺えるのは、余裕のあるイロニーではなく、またフモールでもなく、より辛辣な批判である。

このような複雑に屈折した精神はニーチェのほとんどすべての作品に窺うことができるが、コンプレックスの思想家が完成される前の少年期のニーチェには、例外的にそのような機軸の枠組みを嵌められていないいわば心の原石がみえて、印象鮮やかなテキストがある。そのような一例として、1861年10月19日の日付のある「友への手紙」を取り上げてみたいと思う。ニーチェが17歳になったばかりのプフォルタ学院卒業間じかに作文の課題として書いたものである。おそらくは、虚構の手紙文である。そしてその虚構のゆえにか、非常に真率な心情告白ともなっているのである⁽⁴⁾。

「友への手紙」は、副題を持っていて、じつはこれのほうが内容を語っているのであるが、「僕の愛する詩人の詩を読むように君に勧める」とある。ここに熱烈な敬愛の情を捧げられている詩人こそヘルダーリンである。

(3) Das grosse Duden, 1980 Mannheim

(4) Friedrich Nietzsche: Autobiographisches aus den Jahren 1856-1869

この時代にヘルダーリンが取り上げられていることの一事をもってしてもこれは、瞠目すべきことであろう。ヘルダーリンの死は、1843年であるが、晩年の30年近くを精神の闇のうちに過ごした詩人の存在は、19世紀にはまともに顧られることはほとんどなかったからである。おそらくニーチェが読んだテキストは、詩人の死後編集されたグスタフ・シュワープの手による作品集だったと推測される⁽⁵⁾。もし、ニーチェが独力でこの詩人にたどり着いたとすれば、宿命というべきか、いずれにしても慧眼といわなければならない。この出会いは、ほとんど奇跡だと言えよう。手紙の末尾で手紙の目的を友人に対して「ドイツ人の大多数にはその名前さえほとんど知られていないかの詩人について多少のことを知ってもらい、偏見のない評価をするように⁽⁶⁾」なってくれるように努めることだと記している。若きニーチェはいささか義憤を感じながら詩人を不当な忘却の淵から救い出し、顕彰する使命を自らに課したのである。この手紙は、たしかに友人に宛てられた私信ではあるが、実際は1860年ごろの当時のドイツの文化状況批判といえるような内容をたぶんに含んでいる。文面にはある種の憤懣あるいは憤りの調子が明らかに見て取れる。

まずニーチェは友人がよこしたといわれる手紙への反論から始めている。そのやり方はなかなか執拗だ。友人の手紙から引用がなされている。友人の言葉がいわば断罪の俎上に載せられるのである。友人は次のように書いたのだという。

「ヘルダーリンが君の愛する詩人だとは僕にはどうしたって理解できない。少なくとも僕には、このずたずたに切り裂かれた感情の、あいまいで狂気じみた声は、悲しい、また嫌悪感を引き起こすこともある印象しか残さない。不分明な饒舌、時として狂った思想、ドイツに対する厳しい弾劾、

(5) Gustav Schwab: Hölderlin Werke in zwei Bänden 1849

(6) ニーチェ「友への手紙」, Friedrich Nietzsche: Brief an meinen Freund 1861

異教的世界の崇拜，自然主義かと思えば汎神論，そしてまた多神教と，こういったものが雑然と入り混じり，ヘルダーリンの詩の世界を織り上げている。もちろん，上手なギリシャ風の韻律で⁽⁷⁾]

たぶん虚構の手紙ということもあるのだろう，いくぶんの誇張は紛れもないが，ネガティブな評価を除けば，ヘルダーリンの詩の世界の特徴を言い当てているとも言えるのではないか。そして，皮肉にもそれは，その後のニーチェの世界を予言的に言い当ててはいないだろうか。もちろん弾効の調子さえ感じられるほどに否定の評価であるが，ここにはすでにニーチェの聖なるものに対する独特に屈折した，すなわち弾効とも，あるいはそれと同時に賛仰ともいえる対し方が窺えるようにおもわれる。それに振幅の大きい表現の激しさもあいまって，心揺すぶられるものを感じずにはいられない。

また，これは当時のドイツにおけるヘルダーリンについての評価を簡潔に要約した証言とも位置づけられよう。このような否定的な扱いあるいは無視というのが一般的な受け止め方であったのではないかということは容易に察せられる。その意味でニーチェの友人に対する反論は，その友人を超えて当時のドイツの知的世界に対する憤懣であり，そういう意味での反論だったともいえる。それは同時にビーダーマイアーといわれる時代と文化に対する批判者としてのニーチェの精神の原型を鮮やかに刻印するものであった。もともとそのような精神性を持っていたといえたとしかにそうであろうが，ヘルダーリンという詩人がそのようなニーチェに大きな触媒として働いたことに疑いはないであろう。というのもこの時ニーチェがヘルダーリンに見たものは，彼自身の姿としか言いようがないからである。ここで言及されているのは，もちろんヘルダーリンのことではあるが，そのままニーチェが後に自らの問題として展開する世界そのものの原型的表現であろう。ニーチェにヘルダーリンに対して直覚的にでも感応するもの

(7) ebebda

がなければ、このようなことは考えられない。ニーチェはたしかに詩を書いているが、論者はその事実よりもこのような感応を持ちえたことに真の詩心を見たいと思うのである。しかし、おそらくそれは宿命的な一回性のできごとだったかもしれない。いまだ強い心理的機制を自らに課していないころの若きニーチェの感覚が心置きなく存分に表出された稀有な機会ではなかったかと思われる。

さて、この友人からの非難に対して、事細かく反論し、詩人の名誉を回復しようというのがこの手紙という形をとった詩人論の趣旨である。先の友人からの批判に対してまるで言葉尻を捕らえてまで絡むような反論をする。

「上手なギリシャ風の韻律で、とはなんということだ。冗談じゃない、それが君のほめ言葉のすべてか。ヘルダーリンの詩句は、その形式面からだけでも最も清らかで柔らかな感情からほとぼしり出たものだ。技巧的でなく、ものごとの根源に迫っていくという点で詩人プラーテンの芸術と形式上の技巧をはるかに凌駕する詩句、荘重な頌歌風の高揚を見せながら悠然とうねるかと思えば、またこの上もなく細やかな憂愁の響きへと迷い込む詩句を、君はあろうことかありきたりの「上手な」という一語でしかほめることができないのか。⁽⁸⁾」

一般性と通俗性はみごとに突破されているが、痛快なほどである。この文脈における上手という形容詞の使われ方は、ほとんど否定的なニュアンスを帯びているといってもよく、ヘルダーリンの世界との無縁性を明らかにしていることが暴露される。そしてまた、ニーチェの擁護する詩人の特質がなんと肌理細やかに表現されていることだろうか。ヘルダーリンの詩句がものごとの根源に迫っていくというのはその原理的なところを言い当てていて実に的確である。とてつもない高揚感と悠然たる流動感、そして細やかな憂愁の響き、これらの要素がことあげされているとともに、それ

(8) ebebda

らが微妙に交替を繰り返すさまが簡潔に捉えられていて、これに対し単に技巧的な意味でうまい、上手というのがいかに浅薄な批評であるかが完膚なきまでにあらわにされる。

ニーチェにプラーテンに倣ったと思われるヴェニス頌歌⁽⁹⁾があるなど、この擬古典主義の詩人はその古典的な形式感および濃厚な唯美性ゆえにおそらくニーチェ好みの詩人であったろうが、プラーテンの芸術は形式上の技巧によるものだと喝破され、ヘルダーリンと同一の世界に並ぶものではないことが指摘されている。これはプラーテン評価が低いということの意味するものではない。ヘルダーリンの位階が群を抜いて高いということなのだ。その後のニーチェの詩人としての歩みを考えてみると皮肉なものがあるといえよう。なぜならニーチェが詩として展開した世界はあきらかにプラーテンの衣鉢を継ぐものであり、どうみてもヘルダーリンの世界は見えてこないからだ。論者は先の論文のなかで指摘したことだが、思想家ニーチェの世界はそのまま直接的にヘルダーリンのそれに依拠しているとはいえないだろうが、たとえば古代ギリシャ芸術に対する関心のありよう、キリスト教に対しての距離のとり方、あるいはドイツ批判、ラディカリズムなど両者に共鳴する観点は幾重にも明瞭にあり、あたかも精神の深い血縁を思わせるものがある。それだけにニーチェがヘルダーリンから離れてプラーテンのほうに傾斜していったことは注目に値する。さらに考え合わせるべきことは、果たしてニーチェの詩業がプラーテンほどの詩的密度を達成しているかということである。おそらくニーチェにとってプラーテンという詩人は精神的血縁者として近すぎたのだ。このようなある意味で完成された詩人がいたということは、詩人ニーチェにとって決して好ましい事態ではなかったと考えるべきだろう。

それではヘルダーリンに対する距離感、親しさと遠さはどう捉えればいいのか。ニーチェは、ヘルダーリンを真正な詩人と認め、圧倒的な感銘を

(9) Friedrich Nietzsche: Gedichte, 1961 München

受けていたことは、上述の反論からもわかるであろう。この点ニーチェの判断にはいささかの揺らぎもなかったことであろう。若き感性ゆえにその判断には間違いはないと思われる。しかし、それゆえにこそニーチェはヘルダーリンをあえて遠ざけたのではなかったか。ある意味でそこに絶対的なものを見てしまったということだろうか。所詮そのような詩人の真似はしようがないのである。精神的な血縁関係が濃厚であればあるほど、主題を共有する度合いが強ければ強いほど、別の道を開拓しなければならないということであろう。ここで後年のニーチェのヘルダーリンに対する妙に突き放したような態度が気になる。ニーチェは、神的な力との邂逅を描く詩人の磁場からあえて身を遠ざけようとしたのではないかとさえ思われてくるのである。

それでは、詩人ヘルダーリンとは別の道とは何か。もちろん詩人ニーチェということではないはずである。ゲオルゲも自らの頌詩「ニーチェ」において引用する「歌うべきであった、語るべきではなかった、この新しい魂は⁽¹⁰⁾」というニーチェ自身の自己批評は、皮肉なことに見果てぬ夢にとどまったのである。じっさいニーチェの本領は圧倒的な量の語りによってこそ発揮されたのである。散文家ニーチェの誕生である。そしてかれは、それとともに次第にヘルダーリンから遠ざかるように思われる。推量にとどまるが、ニーチェはヘルダーリンから受けた圧倒的な感銘を深く胸のうちに秘めながらも、詩人とは別の方法で自身の、そしてまたそれは同時に詩人のものでもある主題を展開したのではなかったか。血肉化したキリスト、ディオニュソス神、ドイツ批判などを彼らは問題として共有している。しかし、もちろん若きニーチェのヘルダーリン弁護は揺るがない。友人がそもそもまともに詩人を読んでいないとって非難しているのである。

「君は、不分明な饒舌、時として狂った考えなどというが、これら君の軽蔑の言葉を読んですぐわかったのだ。まず、君はつまらぬ偏見にとらわ

(10) Stefan George: Nietzsche, 1983 München

れているということだ。それに、これが一番よくないところだが、君はヘルダーリンの詩も、それ以外の作品も読んでいないから、君がヘルダーリンの作品だと思っているのは、じつは君が自分勝手に漠然とそうだと想像しているものでしかないということだ。(11)

まさか友人が詩人の作品を読んでなかったということはないだろう。おそらくより本質的な批判の主眼点は、読み方にあったのだろう。友人にはヘルダーリンの言葉がその胸に食い込むことなく、ただ通り過ぎただけだったのに対して、おなじその言葉がニーチェの魂を震撼させたという違いである。これは、あまり議論しても仕方ないことかもしれない。なぜなら読み手が感動したか、しなかったかということは、まさに読み手の問題であって、良し悪しでいうことはもちろんできないし、「お前は偏見にとらわれているなどといって」他者に自分の読みを強いることもできないからである。感じるとしたら自分で感じる以外にはないのである。だが、一方では他者の感動を受けて心を動かされる、そして蒙を啓かれるということもあるのだ。そしてその感動を受けとめた方が心を動かされたのであれば、それももちろん感動である。このようなプロセスに教育という言葉は必ずしもふさわしいとは思われないが、やはり広い意味で人を動かし、変えるのであるからまさに感化ということに違いはない。ただし、その前提は確認しておかなければならない。それは、当然のことながら伝えるほうが感動しているということであり、それを誰かに伝達しないではいられないという強い欲求をもつということだ。そして、できれば相手の読みを根本的に変えてやりたいとおもうであろう。「そうだと漠然と自分勝手に想像している」世界を解体し、まったく思ってもみなかったような新しい世界の姿を見せて、さらにそれを共有してもらいたいのである。ニーチェが友人に対して論していることはこのような心的構造の上に成り立っていると見てよかろう。

(11) ニーチェ「友への手紙」

しかしながら、友人のヘルダーリンについての漠然とした全否定的印象というのは、それなりにヘルダーリンのある面を言い当ててもいる。これは、取りようによっては、詩人にとって栄光ともなりうるからである。それほど、この詩人は一般的な理解を受け付けず、屹立していたのである。

ニーチェがこの文を書いた当時、やはりヘルダーリンはよほど知られざる詩人であったのだろう。一般には、名を知られることさえすくなかったかも知れないし、知られていたとしても挫折した狂気の詩人というところだったのではないか。ニーチェはあたかも教育者のように友人を啓蒙する。かれは、詩以外の作品も紹介している。まずは、未完の戯曲「エンペドクレス⁽¹²⁾」である。これについては、次のように評価している。

「この断片に終わった作品の憂いに満ちた調子からは、不幸せな詩人ヘルダーリンの行く末が、長きにわたる狂気の墓標が見て取れる。ただそれは、君が非難するような不分明な饒舌としではなく、この上なく純粋なソフォクレス風の言葉と限りなく充実した深遠な思想としてだ。⁽¹³⁾」

ヘルダーリンの悲劇と宿命をなんと簡潔に捉えていることか。論者はここにおいてもニーチェそのひとの行く末を重ねて読む誘惑に駆られてならない。「この上なく純粋なソフォクレス風の言葉と限りなく充実した深遠な思想」という評語は、ギリシャ古代を仲立ちにして二人の詩人・思想家が完全な協和音のもとにひとつに結ばれたことを証し立てている。エンペドクレスの死を神々の誇りゆえの死、地上の生への倦怠とみなし、この作品の中にひとつの神のように崇高なものが生きていと感じ取れるニーチェは、疑いもなく詩人の精神的血縁である。

次にニーチェが紹介するのは、「ヒュペーリオン⁽¹⁴⁾」である。

「ヒュペーリオン」も君は知らないとみえる。文体がこころよく躍動的

(12) Friedrich Hölderlin: Empedokles, 1992 München

(13) ニーチェ「友への手紙」

(14) Friedrich Hölderlin: Hyperion, 1992 München

で、描かれている人物たちが崇高で美しく、ほくは読むうちに荒海の寄せでは返す波のような印象をおぼえた。この散文は、本当に音楽だ。甘美な響きは痛々しい不協和音によって中断され、はては鈍い不気味な挽歌となって途絶える。」

後年の思想家ニーチェは、その饒舌によって自らの感性を覆い隠してしまふところがあるが、ここにはまさに若きニーチェその人の感覚が直接的に反映されていて、躍動的な批評文となっているのを確認することができる。もし真正の詩人をニーチェにおいて見出そうとするならば、この時期のものを措いてほかにはなからう。ここにおいてこそ、逸る意欲と毒舌によって曇らされる前の裸形の感性を窺うことができるからである。また、音楽として作品を捉えているが、この指摘はディオニュソス神を生と芸術の原動力と見るニーチェとしては、最も早いころの音楽との幸福な出会いと見ることができよう。ここで残念に思うのは、おそらく当時のテキストの制約からして、ニーチェは、ディオニュソス神とイエスキリストを重ね合わせる「パンとぶどう酒」を含むヘルダーリン後期の讃歌群に触れていない点である。もし若きニーチェがこの時代にそのような作品に接していたら、大変な火花が生じたに違いないと思うからである。そしてそれは後年のニーチェの思想に大いなる展開をもたらしたと思われる。いずれにしても、詩人の「ヒュペーリオン」という散文作品の中に音楽を見出すことができたのがニーチェであったことには注意しておきたい。ニーチェは手紙の中でさらに、ギリシャへの憧憬がここにおいてほど純粹な響きをもってあらわになっているものはないというが、ギリシャへの憧れという主題、そして表現の純粹さという点での評価、これらもニーチェであったからこそありえたものだと思う。

ヘルダーリンにおける苛烈なドイツ人批判という点もニーチェは忘れていない。

「ヘルダーリンの詩にはドイツ人に対して厳しいことを言うことで際立つものがかなり多くあるが、これも残念なこととはいえ、詩人の言うとお

りだといわざるを得ない場合があまりにも多いのではないか。「ヒュペーリオン」でも彼はドイツ的なものの「野蛮性」に対して鋭くも厳しい批判の矢を放っている。しかし、現実に対するこの憎悪はこのうえない祖国愛と融合することができる。ヘルダーリンは本当に最高の祖国愛を抱いていたのだ。(15)】

繰り返しいうことになるが、ここに描かれているのが詩人の姿であって、同時にそのままニーチェのそれに重なって見えてしまうことも否定しがたいところであろう。そこには、後の思想家ニーチェ自身のドイツに対する二律背反の心理的構造まで解析されているようで、ほとんど痛々しいほどである。ヘルダーリンにおけるドイツ批判をニーチェは、おそらくは「ヒュペーリオン」をもとにして、単なる専門性に自分を閉じ込めることに對するそして偏狭な俗物性に対しての戦いとみており、その戦いのなかで詩人は癒されることのない傷を負い、挫折を余儀なくされるが、作品そのものを「いわくありげな微光に包まれているが、まだ自由闊達の域には達していない(16)」と、いささか否定的な見方をしている。ニーチェにとって作品としては、散文「ヒュペーリオン」よりも劇作「エンペドクレス」のほうがより近いものであったのだろう。後者のほうが高い評価を得たのは、悲劇性が際立つからだ。ひょっとしたらニーチェは、ヒュペーリオンに純粋な魂の聖性は認めるものの、後のヘルダーリン批判へと通じる人格上の弱さを見つけ出さずにはいられなかったのかもしれない。ニーチェは「ヒュペーリオン」に登場する人物を「郷愁を呼び起こす響きとなってわれらの周りにざわめき、われらを恍惚とさせ、満たされることのない憧れの感情を誘う幻像(17)」といているが、これは論者などにはむしろ賞賛の批評とも思われるが、ニーチェの文脈においては、もちろん否定的なも

(15) ニーチェ「友への手紙」

(16) ニーチェ「友への手紙」

(17) ebenda

のだろう。このように一概に否定的とも肯定的とも言い切れないところにニーチェの批評の命はかかっているのだと思われる。しかし、ニーチェの見方の否定性は否定しがたい。とくに「幻像」という言葉にそれは明らかに示されている。ニーチェはヒュペーリオンのありようが幻であることに不満を覚えているのだ。傷口を曝したままゆたい、嘆きの歌をうたうのではなく、破滅するならば劇的な終焉を、そしてもし可能ならば傷ついても地上における勝利の栄光を求めたのだと思われる。もちろんそれは、ないものねだりである。この点では、ニーチェは一步踏み出しすぎたといえるであろう。弱さの克服という主題は、ニーチェ生涯の課題でもある。ヘルダーリンを批判するニーチェが果たしてそれを克服できたかどうか、はなはだ疑わしい。のちにヘルダーリンを批判するニーチェは、じつは自己批判を行っていたともいえるだろう。それだけに詩人との距離は微妙である。

しかし、この時期のニーチェはまだ結論を急ぐことはしない。詩人ヘルダーリンを守護神としていることにいささかの疑いもないのであって、ヘルダーリンの抱える矛盾、葛藤はこれからの課題として開いたままにしておこうとするのである。これは詩人に対するへりくだりの姿勢であると思われる。

「きみが、ヘルダーリンの宗教上の見解が矛盾しているといって非難することに対しては、僕は何もいわない。それはこちらの哲学的な知識があまりにも貧弱だからだと考えてくれたまえ。このことを立ち入って考察するためにはかなり高度の哲学的知識が必要なのだ。…（中略）…この点が解明されれば、詩人が精神錯乱の状態に陥った原因も少しは明らかになるかもしれない。(18)」

これは、詩人の言語に現れる矛盾を矛盾として受け入れつつも、単に病理的現象として捉えるのではなく、哲学的課題としてその解明を他日に期

(18) ebenda

すという精神の姿勢である。ニーチェは、このくだりの直前で詩人のシラー、ヘーゲルとの近さを指摘しているがヘルダーリンの狂気が人として可能な精神活動の臨界点に生じたものであることを示唆しているように思われる。ヘルダーリンの大半は断片に終わった膨大な理論的考察をみれば、いかにかれの哲学的志向性が強かったがわかるであろう。ヘーゲルのいわゆる弁証法も間違いなく親友ヘルダーリンによって先取的に、またより尖鋭な形で実践されていたのである。彼の残した哲学的、詩的断片の数々を見れば、まさに矛盾の集積ともいえるような試行的思考の痕跡は、地上に生きる人の限界の思考の極限を見せていて、文学的人間的感動を誘わずには措かない⁽¹⁹⁾。また、ニーチェに立ち返れば、果たしてその後のニーチェが自らその地点まで詩人の精神の運動に肉薄しえたかどうか、あらためて問わねばなるまい。たぶん、思想家ニーチェは、詩的言語ではなく、散文において、そしてまた、言語よりも人生そのものにおいて「キリストにならいて」のごとく詩人の跡をたどったのである。ここにおいても、思想家は歌うのではなく、語ったのである。若きニーチェに自身の精神錯乱の予感があっただろうか。以上が「友人への手紙」の概略である。自分でも興奮していると認めるほどの若きニーチェのヘルダーリンに対する感激と尊崇の念の表明は、紛うかたない。

2. 詩人の消去

これほど宿命的な詩人との出会いを遂げたニーチェの師表とも言うべきヘルダーリンに対するその後の見方はどうであろうか。それを次に問題として取り上げてみたい。まず指摘しておかなければならないのは、1861年に書かれた上述の熱烈なヘルダーリン頌を前にすると、その後の詩人に対する言及が彼の膨大な発言の中で驚くほどわずかだということ

(19) Friedrich Hölderlin: Theoretische Schriften, 1998 Hamburg

ある。とくに古典ギリシャがとりあげられる「悲劇の誕生」などギリシャを素材とするもの、あるいはニーチェの生きていた19世紀のドイツおよびドイツ人に対する俗物批判などのテーマで展開される論考はおびただしい数に上るが、そこにはほとんどヘルダーリンの名が登場することはないのである。この二つの事柄をめぐってヘルダーリンとニーチェの二人ほど激しく、そして深く考えた人たちはいないであろう。このことを思うにつけニーチェの詩人に対するそっけなさは、不思議なことであるばかりでなく、何かかえって問題性を喚起し、それがあらためて取り上げるべき主題だと思われてくるのである。

若いころにあれだけの詩人論を展開することのできた思想家ニーチェの関心が詩人から離れてしまったとは考えられない。際立った主題、それに対する奇想ともいえる独特な見解、受難というべき生き方といった本質的な部分での共感あるいは共鳴ということを考えてみれば、なおさらにそうである。このなぞを解き明かすことは、ニーチェの心理の構造を解明することにつながることだろう。

毀誉褒貶は当然のこととして、「悲劇の誕生⁽²⁰⁾」(1871年)によって自らを確立した思想家ニーチェにとっても、聖なる詩人ヘルダーリンは尊崇の対象であり続けただろう。1875年5月24日付けのリヒャルト・ワーグナー宛の手紙がある⁽²¹⁾。これは、師と仰ぐワーグナーの62歳の誕生日を祝賀するためにニーチェが捧げたものである。ここにはヘルダーリンの詩「ドイツ人の歌」が引用されるばかりでなく、献呈されているのである。いかにヘルダーリンに対する評価が高いものであったかがわかるであろう。この詩は、民の聖なる心、祖国とその大地への絶対的帰依を強く告白し、その息子らはそれによって精神を養っているにもかかわらず、感謝を捧げ

(20) Friedrich Nietzsche: Die Geburt der Tragödie aus dem Geist der Musik, 1973 München

(21) Friedrich Nietzsche: Briefe Band1, 1973 München

することもせず、その存在をないがしろにしさえする、このような現実に対する嘆きが語られつつも未来にはかない希望が託されるといった内容で、その詩の終結部の二連は、次のように書かれている。

最高の祝祭の日に わたしたちが相まみえるあの場所は、
あなたのデーロスは、そしてまたあなたのオリンピアは、 いずこにある。

だが、あなたの息子は、あなたがあなたの者らのために用意してきたもの、あの不滅なものを、どのように解明するであろうか⁽²²⁾。

おそらくこの詩を献呈することによって、師である聖なる芸術家ワーグナーとその忠実な使徒である自分を、聖地パイロイトの祝祭の場に立たせて、芸術の未来を寿ぐことにニーチェの趣旨はあったと思われる。その際立会いの詩の司祭として聖なる詩人ヘルダーリンが呼び出され、二人の師弟を祝福するという図柄を思い描いていたのではないか。だが、ヘルダーリンに即して言えば、この詩で詩人は必ずしもニーチェが望むような祝祭的な喜ばしい気分を喚起していない。あなたと呼びかけられる聖なるものは、詩人が人々の忘恩の振る舞いにいかに慨嘆し、怒りを表明しようと、黙して語らない。「明るい仕事⁽²³⁾」を企てるばかりである。明るい仕事とは、聖なるものを証し立てる言葉の形象を着実に作り出すことである。詩人はいつの日にか人々の理解が成就することを願いつつも、現実においては受難の日々を送らねばならぬことを心得ている。ベシミスティックな感情と不安のうちに、必死に現実に耐えながら、一筋の希望の光を未来において手放さない。このような心の緊張や揺らぎは、ニーチェの解釈には生かされていないと思われる。おそらく、ニーチェは、ワーグナーと自分の

(22) Friedrich Hölderlin: *Gesang des Deutschen*, 1992 München

(23) ebenda

二人きりの友情を寿ぐために、ヘルダーリンの詩のもつ通奏低音的な憂鬱の感情を薄め、基調をより積極的、より現実的なものへと転じていったのではないか。じっさい、この詩の引用が終わってから、ニーチェは次のようなコメントを加えて憚らない。

「これはすべてかの哀れなヘルダーリンが述べたことです。詩人の場合、私とは違ってうまくはいかなかったのです。私たちであれば、信頼を寄せあい、注目すべきことを、ヘルダーリンは予感するにとどまったのです。(24)」

こう述べられた時、ヘルダーリンはワーグナーとニーチェの精神的な共有空間から遠ざけられたように見える。いかにニーチェのワーグナーに対する愛情告白の場であっても、これでは聖なる詩人にたいする敬意に欠けるといわざるをえないだろう。周知のようにワーグナーとニーチェの関係は、のちの経緯において劇的に反転するが、この時点で言えるのは、それが少なくともヘルダーリンの詩の世界に比べるべくもなく、よくいえば人間的、悪くいうなら世俗的、いずれにしてもきわめて現実的な面を含んでいたということだ。この文の中での言葉遣い「哀れなヘルダーリン」というのはやはりその意味で詩人の生涯を思う同情と共感ばかりではなく、少し突き放すような否定的なニュアンスをもってしまう。気になるところである。詩人の言葉に立ち返ろう。純粋な魂を持った詩人は、理解を求めつつもその息子たちからも真の理解を受けることなく、ひとりドイツの精神の大地を養い続けるのである。かれに忠実なはずのニーチェからも理解されたとはいえないのである。

前にも述べたように、そもそもニーチェにとっての聖なるものに対する姿勢は、はなはだ複雑であって、一概に愛とも憎ともいえない複合的なものである。ワーグナーに対する態度はその典型的なものであるが、ニーチェの生涯にわたるかわりの仕方に見られる愛憎における振幅は、異常な

(24) ebenda

ほどに大きい。私淑したショーペンハウエルにしてもそうである。また、若きニーチェがボンとライプチヒで学恩を受けた文献学者リッチェルに対しても、対ワーグナーほどではないにしても敬愛とばかりはいえない接し方をしている。プラトンに対するアリストテレスの態度を引き合いに出すまでもなく、学問の世界では、いくら恩師といえどもその人に忠実ということよりも、真理に忠実でありたいと思うものだろう。とくに新たな切り口を求めようと意気込むニーチェにとって少々礼を失することぐらい敢えてしたのではないかと思われるが、彼の心理の底には、いつも愛と憎というような二律背反的な機制が尋常のほどを超えて働いていたのではないかと思われる⁽²⁵⁾。そこでは、ややもすればバランスを失って対象を見失うことにもなりかねない。はなはだしい場合はひとり相撲の様相を呈してやることもある。その意味では、自己中心的世界といえよう。ニーチェの場合、このような感情の坩堝のなかで対象を溶かしつくし、同時にみずからも破滅することによって自分とともに対象の世界を開いてみせるといった風がある。その対象として現実的なところで最大の存在といえばワーグナーであろうし、超越的なものでいえばイエスキリストということになるであろう。いずれにしてもこれらの聖人たちは、ニーチェが生涯を通じて、そして生涯を賭けて追い求めた対象であって、どぎついほどに濃厚な感情の坩堝において完膚なきまでに批判され、同時に愛されたのである。このような感情の揺れの両極端を含まないものは、ニーチェにとって真の関心事とはいえないのではないかと思われる。たとえばダーヴィッド・シュトラウスについての批評は、一方的な否定なのでニーチェの毒舌が発揮された例とはいいいにくいものだろう。ここにはイロニーが欠けているからだ⁽²⁶⁾。

(25) Friedrich Nietzsche: Briefe Band 2, 1992 München

(26) Friedrich Nietzsche: Unzeitgemässe Betrachtungen 1-3 S.24-26, 1992 München

ヘルダーリンに対するニーチェのその後の批評をさらに追ってみよう。「反時代的考察⁽²⁷⁾」のなかで、ヘーゲル派の美学者フリードリヒ・フィッシャーが行ったというヘルダーリン記念祭における講演が引用されている。そこで、ニーチェはヘルダーリンのことを「騒がしい俗物の仲間によって、ひとりの真の非俗物、そして言葉の最も厳格な意味で俗物のために没落した非俗物⁽²⁸⁾」とよんでいる。評価はもちろん高いのだろうが、その言葉遣いの執拗さには、何か含むものがあるように思えてならない。さて、フィッシャーは、ヘルダーリン死後からドイツ帝国成立までの歴史的経緯と現実のなかに詩人をおくという仮定の場合を思い描いている。かれはいう。「その柔和な魂はあらゆる戦争にまつわる非常に多くの粗暴な行為に耐えうるか、またわれわれが戦後あまたの領域において進行するのを目撃した多くの墮落した現実に耐えられるかどうか、私にはわからない……彼の精神は堅さをほとんど持ち合わせていなかった。かれには、武器としてのフモールが欠けていた。かれは、ひとが俗物でありながら、依然として野蛮人ではないことに耐え得なかった。⁽²⁹⁾」ニーチェはこの説を踏まえたとで、詩人の没落について語る。「かの美学者は、明らかにわれわれに次のように言おうとしている。ひとは俗物でありながら文化人でありうると。まさにこの点に、哀れなヘルダーリンに欠けていたフモールが存在するのであって、これが欠けていたために詩人は没落したのである。⁽³⁰⁾」これは美学者フィッシャーを俗物として批判するものであり、詩人の悲劇的な栄光をたたえる趣旨の文である。しかし、ここにははなはだ微妙なところではあるが、ひそかに詩人の没落そのものを批判する意志が隠されてはいないだろうか。ニーチェは、「反時代的考察」の別の箇所でも、次のようにも

(27) ebenda 1-3 S. 25

(28) ebenda 1-3 S. 25-26

(29) ebenda 1-3 S. 27

(30) ebenda 1-3 S. 28

述べているのである。「わが国のヘルダーリンやクライストのような人々は、その非凡さゆえに滅びた。そしてベートーベン、ゲーテ、ショーペンハウアー、ワーグナーといった筋金入りの才能だけが生き延びることができたのだ。(31)」破滅、あるいは没落したロマン派の天才たちは、たしかにその非凡をたたえられてはいる。だが、ここでは、彼らはベートーベンをはじめとする仕事において生涯を全うしえた後者の偉人たちの影に隠れてしまうのは否みがたい。この点でのニーチェの判断は、明らかに示されていると思う。

そして、次に引くアフォリズムのようなものともなると、明らかにある一線を越えてしまっているといわなければならないだろう。

「過度の繊細さによって最も優秀な本性の持ち主たちがこの世と疎遠になるという、誤った理想主義に反対して、全南欧が聖職者たちの禁欲によって、あの極めて制御された官能の遺伝性を失ってしまったというのは、なんと残念なことか。シェリーやヘルダーリンやレオパルディーのような人たちが破滅するのは当然のことだ。わたしは、こういう人たちを重んじたりはしない。私には、粗野な自然がこういう類の人々において復讐を遂げることを考えることは、(レオパルディーは以前手淫に耽り、後に不能となった) 喜ばしいことだ。(32)」

また、こんなアフォリズムもある。

「ヘルダーリンやレオパルディーのような者たち。このような人々の破滅をあざ笑うことができる程度にわたしは冷酷である。人々は彼らについて思い違いをしている。いつも素朴さを欠くこういう種類の超プラトン主義者は、始末が悪い。なにかが人の内にあって粗野で荒々しくなければならない。さもないと、ひとは笑止なことに、極めて単純な事実(たとえば、男は、時々十分な食べ物を必要とするように、女を必要とするというよう

(31) ebenda 3-3 S.55

(32) Friedrich Nietzsche: Die Unschuld des Werdens 996, 1973 München

な事実)との歴然とした矛盾葛藤のゆえに、破滅するのである。(33)」

ここにはもはや破滅した天才たちに対してほとんど何の敬意も同情すらもうかがわれぬ。底意地の悪い嘲笑すら感じられるであろう。ニーチェは以前彼らをより強靱な天才たち、ゲーテやベートーベンと対比していた。しかし、果たしてゲーテやベートーベンが粗野であったらうか。ここでは、弱さが決定的に嫌悪の対象になっているのだ。いささか常軌を逸した書きぶりは、おそらくそれゆえの逸脱なのであらう(34)。いずれにしても、ヘルダーリンの純粋さや繊細さは、ほとんど弱い精神の現われとしてしか扱われていない。これは、しかし、見方を変えれば、これはニーチェ自身の肖像でもあるのではないか。ニーチェは、みずからの弱さに敏感なあまり、他者の見せる弱さを容赦することができなかつたのではないかと思われる。

「いまや高級種の人々が数限りなく徹底的に没落していく。しかしこの没落をまぬかれる者は、悪魔のごとく強い。(35)」

ここでニーチェは、悪魔のように没落者を嘲笑し、強さを誇りたいのであらう。彼は次々と激しい言葉の矢を放つ。

「ニヒリズムが到来する——弱者はこれで破滅する。(36)」「あの宿業こそ讃えられるべきである。〈徹底的に没落せよ!〉と弱者に命ずるあの宿業こそが——(37)」「私は、上昇する生の類型と、頹落の、崩壊の、弱さの類型とを区別する。(38)」(権力への意志 857)

(33) Friedrich Nietzsche: Die Unschuld des Werdens 997

(34) ニーチェは、また「虚弱な本性の人間を破滅させる毒は、たくましい人間には強壯剤となる」ともいう。Friedrich Nietzsche: Die fröhliche Wissenschaft 19, 1973 München

(35) Friedrich Nietzsche: Der Wille zur Macht 131, 1973 München

(36) ebenda 37

(37) ebenda 55

(38) ebenda 857

ニーチェが一連の膨大な弱者批判，強者賛美において，最大の標的にしたものは，キリスト教である。キリスト教のことを「人間を崇高な奇形児に作り上げようとするひとつの意志⁽³⁹⁾」（善悪の彼岸 115）とさえ言うのである。ひとの弱さについてのアフォリズムは枚挙にいとまない。まるで彼が「弱さ」の解剖学者であるかのようにだ。一方強さのほうは，その言辞の中でどのようにあらわれてくるかといえば，はなはだ抽象的ではない。「ひとは，強くなる必要を持たなければならない。さもなければひとは，決して強くなることはできない。⁽⁴⁰⁾」このように言うニーチェは，強さというものを弱さの否定形として描くほかない。強さの究極は，超人ということになるが，これもイメージは明瞭ではない。そもそも超人なる概念は，現実を離れてあるのではなく，現存在としての人間を超えるありうべき存在のことなのである。だから，ニーチェが弱さに拘泥するのも頷けるところだろう。もちろん次のように述べるニーチェ本人にその認識はあった。「一考すべきは，「強い」，「弱い」が相対的概念であるということだ。⁽⁴¹⁾」（悦ばしき知識 118）ニーチェは，最も強い者を次のように定義している。「たいていの不運にも耐えることのできるほど成長し，それゆえに不運をそれほど恐れる必要のない，最も健康に富む者——おのれの権力に確信をもち，人間の達成された力を意識的に誇りながら代表する人間。⁽⁴²⁾」（権力への意志 55）強い言葉遣いはなされているが，かえって発言者の弱さを露呈しているのではないかと思われる。強者を説くに，弱さにこだわる思想家は，それなりに誠実さを証明していると思う。ニーチェにおける弱さの認識はほかならぬ我が身においてなされたものだからである。ニーチェは，ほかに類を見ない自己解剖者であった。ただし，この思索家はあまりにも自らに執着しすぎたのではないか。それによって他者も，

(39) Friedrich Nietzsche: *Jenseits von Gut und Böse* 115, 1973 München

(40) Friedrich Nietzsche: *Götzen-Dämmerung* 38, 1973 München

(41) Friedrich Nietzsche: *Die fröhliche Wissenschaft* 118

(42) Friedrich Nietzsche: *Der Wille zur Macht* 55

外界も、さらには翻って自らも不透明にならなかったか。さきにひとり相撲と言ったのはこの意味においてである。早晚ニーチェの破滅、没落は必定であったというべきである。語るべきではなく、歌うべきであったといっても、真に歌うためには、そして芸術作品を生み出すためには大いなる冷酷さが必要だったのだ。それは、詩人ヘルダーリンを嘲笑するような冷酷さとは違う。「人間的な、あまりに人間的な⁽⁴³⁾」というのは、まさにニーチェその人であったのだ。ある意味でそのような自分の弱さを懲らしめるために、そしてそれを克服するためにニーチェの強者・弱者論は展開されたと見るべきであろう。

没落の詩人ヘルダーリンに対するニーチェの評価の変遷には、おそらくこのようなニーチェ個人の内的、心理的機制が働いていた。敬愛するヘルダーリンに対しての評価が高ければ高いほど、ニーチェは自分の弱さに傷つくのである。ヘルダーリンが弱い詩人だといい、彼をあざ笑うのは、とりもなおさず自分の弱さに対する自己批評であり、自己憐憫でもある。だから、ニーチェのヘルダーリン評価がある時期を境にして急変したと考えるほうがよいだろう。そうではなく、むしろ自己懲罰がより厳しくなったのだと思われる。ニーチェには、やはり神聖な対象を穢してまで、あるいは穢すことによってはじめてそれを愛するという屈折した心的機制がある。キリストも、ワーグナーも、そしてヘルダーリンもそういう意味でのっぴきならぬ敬愛の対象であったといってもよいだろう。論者には、ニーチェのコンプレックスをも突き破る力をそなえた17歳のときに書きあげられた鮮烈な原石の輝きを持つ詩人論が生涯を通じての思索家ニーチェのヘルダーリン体験を証明する真正な感動の記念碑であると思われる。それとともに考え合わせなければならないのは、本論冒頭にも触れた、全体として無視とはいえないまでも、妙に冷淡なニーチェの詩人に対する態度である。キリスト教敬虔主義を背景としていること、キリスト教に対する

(43) Friedrich Nietzsche: Menschliches, Allzumenschliches, 1973 München

二律背反的姿勢，西洋古典に学びディオニュズス神を讃仰したこと，厳しいドイツ批判，ものごとの根底に迫ろうとする過激さ等々の観点でニーチェにとってヘルダーリンほど近い存在はなかったはずであるにもかかわらずそうなのである。しかし，おそらく最も大事な関心事については，まともに語るができないのだ。論者は，このような態度をこそ，思索家ニーチェの聖なる詩人ヘルダーリンにたいする敬愛の表現だと考えている。